

歴史の中の女たち

<第 15 回>

ペリョリーリマの歌姫―

伊藤 滋子

1761 年、新ペルー副王マヌエル・アマトがリマに到着した。バルセロナの貴族の二男として生まれ、11 才で国内の反乱鎮圧に加わって初出陣、15 才でフランス軍と戦い、24 才の時にはナポリ王から勲章を授けられるほどの戦功をあげ、ヨーロッパやアフリカでの数々の戦いに参加したという根っからの軍人であり、ペルー副王は 57 才にして最後に上り詰めた栄誉あるポストであった。囚人が暴動を起こした刑務所に自ら乗り込んで鎮圧したり、戦艦の反乱を鎮めたりした数々のエピソードは彼が何ものをも恐れない豪気の人であったことを物語る。身体には戦いによる傷跡が 5 か所もあり、自分を厳しく律し、独身を通したが女に溺れることもなく、その年になっても野性味を失わなかったという。

ペルーに来るまでの 6 年間はチリの地方司令官として、先住民の襲撃を防ぐために砦を強化し、密貿易を厳しく取り締り、警察組織を整備し、あるいは大学や市場など多くの公共の施設をつくって大いに実績をあげた。いかにも軍人らしく物ごとを余り深く考えず即座に反応し、計算高い方ではなかったが、チリからリマに赴くにあたっては、グアヤキルの造船所で建造させた戦艦をエル・ペルアノ(ペルー人)と命名し、それに乗ってコロンブスの新大陸到着記念日の 10 月 12 日にカリャオに入港するという気配りでリマっ子の歓心を買ひ、大いに歓迎された。

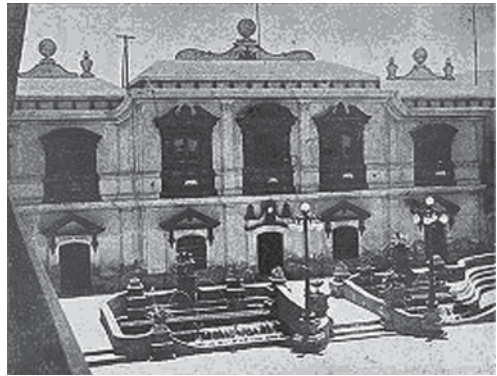
18 世紀半ば、城壁に囲まれたリマは人口 4 万人、広大なペルー副王領の首都として政治に携わる役人の町であるが、74 の教会、25 の修道院があり、神父、修道士、尼僧などを合わせると 7000 人という宗教の町でもあり、また同時にそれに劣らない快楽の町でもあった。マントで顔を覆い身元を分からなくしたタパダと呼ばれる女たちがリマの町を闊歩し、香水や豪華な衣装を武器に大胆に愛をささやくのだ。それに惑わされた男たちは恋のアバンチュールを楽しみ、あるいは手玉にとられ、リマは女の天国、男の煉獄、うすのろの地獄、とまで言われていた。アマトは精力的に仕事に取り組み、リマはこの時代に飛躍的な発展を遂げるのだが、峻厳な軍人であった彼もこの様な雰囲気の影響されたのか、あるいは年をとって気が緩んだのか、数年後ミカエラ・ピリエガスという当節最も人気のある歌姫を溺愛するようになった。

演劇はリマで最も人気のある娯楽で、17 世紀初頭にはすでに立派な劇場があった。1746 年の大地震でリマがほとんど壊滅状態になった時、最初に修復された公共の建物が劇場であり、ドン・キホーテの第 2 部はスペインで出版されるよりも先にリマで上演されていたという。混血のミカエラは 9 人兄弟の長女で家は貧しかったが、当時の女性にしては珍しく読み書きの教育を受け、ロペ・デ・ベガやカルデロン・デ・ラ・バルカに親

しみ、幼少のころから歌や踊りが大好きで、鏡の前で芝居のまねごとをして遊んでいた。ギターやアルパなどの楽器もこなす。15才ではじめて舞台に立ったが、彼女の才能を見出し、女優として磨いたのは実業家のマサで、彼は劇場の経営者であると同時に舞台監督であり、俳優でもあった。想像力豊かで台詞をすぐに覚えるミカエラは彼のお陰で一世を風靡する女優に成長し、悲劇で観客を泣かせたと思えば喜劇で笑わせ、劇場は彼女が出演するたびに満員になった。その噂を耳にした副王は好奇心にかられて舞台を観に行き、彼女の優美な身のこなしやコケティッシュな魅力にとりつかれ、毎晩のように通うようになる。そして人々が気がついた時にはミカエラは副王の愛人におさまっていた。彼女はその名前でもよりも、ペリチョリというあだ名の方で知られる。ある日副王は派手な喧嘩のあげく、彼女に perra chola（混血の雌犬め!）という言葉を投稿つけた。カタルーニヤ人である副王はこれをペリ・チョリと発音し、それが宮廷の外に漏れ聞こえて、たちまち彼女の呼び名となってしまった。

副王を虜にするくらいだからよほどの美人に違いない、と考えるのは早計で、ペルーの作家リカルド・バルマの筆によれば、ペリチョリは背は低くずんぐりむっくりで、色は浅黒く目も小さい。鼻は平べったく決して形良いとは言えず唇は厚い。おまけに化粧で隠しているが、あばただらけであった。しかし豊かな黒髪に、当時の美人の条件である小さい手足、象牙のように輝く小さい歯、情欲をそそる首から肩にかけての線にふくよかな胸、上唇のほくろがまた妖艶であった。絶世の美人だったという反対の説もあるが、写真も肖像画も残されていない。

彼女が副王の愛人となったことが知れるとペリチョリの人気はいやが上にも高まり、彼



ペリチョリの屋敷キンタ・デ・プレサ

女の舞台を見なければ話題についていけないとあって、役人や軍人、詩人、学者、果ては聖職者までが劇場に押し寄せた。女たちは嫉妬からミカエラを無視し、「なんて下品な…あんなに足を高く上げたりして」と眉をひそめるのだったが、庶民は自分たちと同じ身分の女性を愛した副王に親しみを感じた。間もなくペリチョリは21才でマヌエリートという、副王そっくりの男の子を生む。副王は65才、独身を通してきた彼にとって初めての子供であった。副王は彼女のために贅を尽くした別荘(写真)を建て、よくそこで友人を招いては宴を開き、客の前で芝居的一幕を演じさせるのだった。

だがアマトはペリチョリとの愛に溺れていたわけではなく、歴代の副王の中でも目覚ましい業績を残している。まずリマを清潔で安全な町にすることに努めた。道路を舗装し、街灯を増やし、警察力を強化して夜警団の見回りを始め、すり、窃盗、泥棒を即座に処刑にして見せしめとし、あるいは職のない外国人を追放したため、犯罪は劇的に減った。釣り合いをとるために官に対しても汚職官吏を処刑するという厳しい態度で臨み、新規の信徒団を認可しないなど、弛みきった宗教界に対しても締め付けを行う。時のスペイン王カルロス3世の治世を特徴づけるのは、啓

蒙思想、合理主義、王権の強化、反カトリック伝統主義（＝反イエズス会）であり、副王はこれを忠実に実行した。1766年カルロス3世の右腕となり、この目的に沿って国政を担ったのが、アマトの親戚のアランダ公であった。それと関係があるかどうか、通常副王の任期は5年ぐらゐであったが、アマトの在任は15年にも及び、彼は十分に力を発揮できるだけの期間を与えられたのだった。

1767年にはイエズス会の追放の陣頭指揮をとる。この年、王命によりイエズス会は全スペイン領から追放された。ブエノス・アイレスから陸路運ばれてきた追放令を受け取ったアマトは秘密裏に会士たちをヨーロッパへ運ぶ船の準備を整え、捕縛に向かわせたところ、夜中の3時半というのに、彼らは準備万端整えて官憲の到来を待っていた。強力なイエズス会は副王よりも先に追放令を知らされていたと言われる。

だがイエズス会はこれまで絶大な影響力を持っていて巷ではこの追放は不人気で、暗に副王を非難する小唄などが流布する。また厳しい税の取り立てなどを行ったので、これらに対する市民の不満を宥めるかのように、副王は次々と庶民の娯楽の場を増やした。リマック川の向こうでペリチョリの屋敷にもほど近いアチョの1万人を収容できる常設の闘牛場をはじめ、闘鶏場、美しい柵に囲まれて道の両側にはイタリアから輸入した大理石の彫刻が飾られているデスカルススの並木道、水浴場、水のほとりの散策路などの市民の憩いの場が続々と建設された。この散策路はアマトがペリチョリに求愛した時、「月を足元に置いて下さるのならお受けしましょう」と答えたので、副王は大きい噴水を作らせ、満月になるのを待って彼女を散歩に連れ出し、「今夜お前の足元に月を置いてあげるよ」と言ったと伝えられている。他にもナザ

レ教会、サントドミンゴ教会の塔などを建て、あるいはカフェが開かれてそこで新聞を読んだり、おしゃべりを楽しんだりする光景が見られるようになり、リマは近代的な町に生まれ変わっていった。また副王は一冊の本の中にたった一言反宗教的な言葉があるというだけでその本を禁書にするといった無粋なことのないように宗教審問所に圧力をかけ、あるいは新聞の発行を奨励し、町には書店も出現した。

また副王は国益を守ることにも心を砕く。1772年には南太平洋のタヒチにまで遠征隊を送り、そこを領有してイギリスの手に落ちるのを防ごうとした（1775年撤退）。また200万ペソを投じてカリャオの砦を完成させてリマの安全を確保し、ペルー海岸の監視を厳しくしてイギリスの侵入を防いだほか、北はカルタヘナから南はチリのチオレまでの副王領沿岸各地に武器を配布して防衛を強化し、密貿易を取り締まった。これらの事業に必要な財源を確保するために宝くじを創設し、あるいはきびしく税を取り立てて脱税者を徹底的に追い詰めた。

いまや副王に頼みごとのある人は真っ先にペリチョリの顔を思い浮かべるほど、彼女は副王宮廷の中で存在感を持ち始めた。舞台の上では圧倒的な人気を博し、ことに一般庶民はチョラ（混血）である彼女が副王を牛耳っていると思えば、胸のすく思いがするのであった。白髪のかつらで実際よりも年寄りじみてみえる副王がペリチョリの舞台を見ている最中、興奮のあまりかつらを落したことに気がつかないことまであって、宮殿でも町でもその有様を揶揄した小唄や噂がとびかった。ペリチョリはそんな中で次第に高慢になり自制心を失いはじめたのか、ある日の舞台で、長い彼女の台詞がいかにもおざなりで、相方のマサは小声で「もっと感情をこめ

ろ！」と再三注意を促したが、これに逆上した彼女は手に持っていた小さな鞭でマサの顔を打ちつけ、血が飛び散った。これをみて怒った観客は、口々に「牢送りにしろ！」と叫んで、舞台は大混乱となった。

この一件で副王は今度こそ本当にペリチョリという言葉を投稿つて去って行き、同時に彼女は舞台からも降ろされてしまった。しかし子供まで生した仲の二人はやはり離れがたく、2年足らずの間に和解してもとの鞘に収まり、ペリチョリは再び舞台に立つ。復帰後は以前にもまして人気を集め、マサも興業の成功で機嫌を直した。

また以前のように、副王が馬車の中から馬に乗ったペリチョリと窓越しに話しながら町に行く風景が見受けられるようになった。上流の婦人たちはそれに出くわすと、扇子で顔を隠して見ぬふりを装いながら、しっかりと目で後を追う。するとペリチョリはこれ見よがしに一段と背筋を伸ばすのだった。しかしある日、彼女は副王の馬車と一緒に乗りたいと言い出し、アマットは、「そればかりは！」と絶句する。そんなことをすれば、司教や宗教裁判所は黙ってはいないだろうし、スペイン王の耳にでも入れば、何と言われることか。軍隊にも、聖職者にも、泥棒にも、脱税者にも厳しい副王であったが、ペリチョリにだけは甘い副王は散々頭をひねったあげく、高貴な人にしか許されていないはずの馬車を彼女に与えることにした。それは銀のプレートをはめ込んだ、リマでも最も美しい装飾を施された2輪馬車であった。それを、これまた豪華な服に身を包んだ御者が操る4頭のロバにひかせて、目抜き通りを行く彼女はまるで女王様であった。その姿を認めた女たちは扇子で顔を隠すことも忘れ、ポカンと口を開けたまま馬車を見送るのだった。

そのような散策のある日、ロバが突然歩み

を止めた。小さな行列が四つ角に差し掛かっていた。先頭には足元もおぼつかない老神父が十字架のついた聖体箱をささげてよたよたと歩き、後ろに数人の者が従っていた。神父は終油の秘跡を与えるために瀕死の者の家に向かっているところだった。ペリチョリは馬車から飛び降り、服が汚れるのも構わずぬかるみの道に膝まづいて、「臨終に間に合うように、どうぞこの馬車をお使いください」と言って、無理やりに僧を馬車に乗せた。そして副王から贈られた馬車をそのまま教会に寄進してしまった。

1776年、いよいよ副王が任期を終えて帰国する。ペリチョリとマヌエリートには暮らしに困らないだけの年金と幾つかの不動産を残して行った。アマトの政敵が書いた『妾のドラマ』など彼女を誹謗するパンフレットや小唄などが出回ったが、28才の彼女はそれに耐えて、息子を育てながら舞台に立ち続けた。そして40才の時、エチャリというスペイン人と共同で劇場を買い取り、引退した。エチャリは演劇の造詣が深く、二人の経営する劇場は時代の流れに合った舞台でリマっ子を楽しませた。



副王 マヌエル・アマト

アマトはスペインに帰国して5年後に亡くなった。それから更に9年後、成人したマヌエリートはスペインへ渡り、父の財産を相続しようとしたが庶子の悲しさで不調に終わり、すごすごとリマに戻ってきた。アマトは亡くなる前年に、甥が婚約を破棄した相手の娘の名誉を救うためにその女性と結婚しており、財産は彼女に相続されていた。ペリチョリはマヌエリエートの留守の間の寂しさからエチャリと結婚し、13年間

洒脱な彼と円熟した幸せな結婚生活を送ったが、60才でその夫にも先立たれる。晩年はカルメン修道会の尼僧の服を着て修道女の様な生活を送り、慈善事業に精を出して人々から敬愛され、71才で息子や孫たちに囲まれて静かに生涯を閉じた。遺言によって葬式の費用は貧しい人々に配られ、埋葬は非常に簡素であった。

(いとう・しげこ)

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『野蛮から秩序へーインディアス問題とサラマンカ学派』

松森 奈津子 名古屋大学出版会 2009年5月
390頁 5,000円＋税

近代の国際社会を牽引してきたヨーロッパの政治秩序形成は、王権と教会の支配権をめぐる変容と国内統合のほかに、西欧諸国家による非ヨーロッパ地域、すなわち異教世界への侵出という側面をもつ。スペインでは1942年のコロンブスにより「新たに発見された」新大陸の征服にともない、その地の先住民である異なる共同体に属する人々とのあるべき関係をめぐるさまざまな議論が起きた。このインディアス問題、すなわち非キリスト教徒の「野蛮な」人々をも含めた共同体のあり方を提起し、新たな政治秩序を模索する諸議論を牽引したのが、サラマンカ学派と総称される思想家たちだった。

本書は、近代政治秩序がどのように形作られ、そのプロセスの中でのインディアス問題の位置づけを行い、インディオの本性は理性的存在といえるか、スペイン支配の正当性、正しい布教法、分配制（レパルティミエント）／委託制（エンコミエンダ）や催告（レケリミエント）といった法制度の合法性や介入の正当性の前提になる、インディオに対する征服戦争の合法性を、サラマンカ学派の思想の展開を追いつつ考察し、これらの思想の問題点とともに、後の主権国家論に連なる近代政治思想への課題を探っている。国立マドリード大学（コンプルテンセ）で博士課程政治学を修め、国立サラマンカ大学で招聘教員を務めたこともあり、現在は静岡県立大学で政治・国際関係思想とスペイン史を講じる著者が、膨大な文献を読破しての地道な研究成果を体系的にまとめた労作である。

〔桜井 敏浩〕